

### 御渡りをつかさどる八劔神社宮司 宮坂清さんと語る

諏訪の冬の風物詩と言えは諏訪湖の御神渡り（御渡り）。全面結氷した湖上に筋ができて、厳しい冷え込みとともにせり上がっていく。かつて現代ほど科学が発達していなかった時代、御渡りは人知を超えた現象として人々の目に映ったに相違ない。これは神が通ったとしか考えられない一と。

御渡りをつかさどる八劔神社（八劔神社）は今年も1月6日の小寒から毎朝、諏訪湖畔で観察を続けている。古くは平安時代の和歌に登場し、室町時代の1443年から途切れることなく、諏訪湖の結氷や御渡りの出現、出現しなかった「明けの海」という結果がつづられ、現代に続いている。

その581年の歴史は冬の諏訪地方の変化を如実に物語る。50年間に1度あるか、

ないかというほどまれだった「明けの海」は、平成元年から令和3年までの33季で25

回を数えるまでになった。この変化を私たちはどう受け止めるか。



宮坂清宮司(右)は「日本人

は昔から自然と密接にかかわりながら生きてきた。自然の異常が生活の異常につながることをよく理解していた。自然に敏感だった」と語る。その敏感さは地球温暖化から地球沸騰化へと変わる時代を生きる私たちにこそ必要な感覚だろう。

では、私たちは何をすればいいのか。その問いに宮坂宮司は「ごみを拾いませんか」と提案する。（野村知秀）

御渡りをつかさどる八劔神社の宮坂清宮司が「明けの海」の方が珍しくなくなった現代について語る。諏訪市の諏訪湖畔で

